

定年後男性の「はじめの一步」

【若野邦昭さん 横浜農と緑の会 “はま農楽” 代表】



日々を送り、退職時は、ひ弱な身体が、太陽・土・植物のエネルギーから、元気を貰っている。

横浜は、県内でも有数の農業地域だが、農家の高齢化、後継者不足が課題となっている。農作業をしたいけど農地がない、知識・技能がない、仲間が欲しい、農家との接点がないと思っている人に、この講座は、市民と農家を繋ぐパイプ役になり大変いい制度だと思おう。

先に、農業経営士との懇談で「経営としての農業と趣味の農業は違う」「果樹作り20年でも、経験は20回」等のお話を聴き、農業の厳しさ、奥の深さを知り、農家の経営に役立つ活動をしたかと思っている。

【活動内容】

“はま農楽”は「農体験リーダー」の有志が、講座で学んだ、知識・技術を生かし、農と緑の街「横浜を指そう」という目的で集まった、自主活動組織である。農体験リーダーは470人を越え、そのうち194名が“はま農楽”として活動をしている。

●活動の柱

- ・ 農作業の手伝い(通称・援農)
- ・ 緑化等のボランティア活動(長屋門公園、旧奥津邸、地域作業所グリーン)
- ・ 農地保全活動
- 技術の向上、情報交換・交流の取組み
- ・ フローアツブ研修(花、野菜、果樹・植木、草木染、加工品)

区役所のまちづくり事業がきっかけに

【近藤博昭さん 保土ヶ谷宿四百倶楽部代表代行】



- ・ 交流会・研修会(保土ヶ谷花フェスタ、研修会、夕涼み会、ふれあい祭り、収穫祭)
- 【活動の課題】
- ・ “はま農楽”の発足の原点、初心に戻り、ボランティアの精神から離れない活動と農と緑にふれあい、植物の生育のプロセスを眺め、楽しめる活動にしたい。

ケ谷地区の「まちづくりハウス」的な役割を果たしている。

【活動内容】

「昭和62年8月24日に、37名の参加を得て発足した。単なる郷土史の域にとどまらず、町おこし、文化おこしに結び付けたい。歴史をいかし、未来に繋げる活動を続けてゆく」ことを目指している。グループには、区役所職員の外に、歴史好きな区民や商店主やプランナーが集まった。1890年度に始められた「保土ヶ谷宿場まつり」実行委員会のコアメンバーであると同時に、全国レベルの活動としては、国土交通省のバックアップによる「東海道シンポジウム」(1988年度)。最近の市域大会は2004年10月の第17回神奈川宿大会開催に協力。3年前よりボランティアガイド養成講座の開催、人材育成も継続的に行っている。

保土ヶ谷区でそば屋を経営している近藤さんは、「保土ヶ谷の街をおもしろくしたい」という気持ちで、この活動を始めるきっかけとなった。父親が急死し、決心がつかないままそば屋を継いだ。一方「保土ヶ谷らしい」そば屋を作りたいという思いもあり、区役所に相談に行ったのが37歳の時であった。はじめの一步を受け止めたのは、保土ヶ谷区役所区政推進課の職員であった。職員は、「東海道保土ヶ谷宿」を紹介してくれ、行政や地域の人たちと「東海道倶楽部」を結成し、まちづくり活動にかかわっていった。倶楽部の終了時にシンポジウムを開いたところ、100人以上集まったので、市民の会へ移行しようと思

い、賛同者とともに作ったのが「保土ヶ谷宿四百倶楽部」である。その時の盛り上がり、20年の活動の支えとなつていく。「歴史を生かした街づくりをモットーに、幅広い市民活動の場を提供する」ことを目的にした活動は、職業人としての自信にも結びつき、宿場そば屋風な店構えは、保土ヶ谷地区の「まちづくりハウス」的な役割を果たしている。

まとめ 地域への参画 はじめの「歩」はいつから始める

① 増えてきた男性の地域活動への参加

活動の場として利用されることが多い「市民利用施設の入館者の推移」をみると、例えば、各区に数館ずつ整備されている「地区センター」は、1994年度が474・6万人だったのが、2003年には、785・8万人となっている。市民1人でみると、年1・7回利用していることになる。

利用者も男性の比率が増え、高齢者というより、地域と無関心に生きてきた定年後の男性の姿が多いのに気付く。市民活動支援センター、県民活動サポートセンターは言うに及ばず、地域のコミュニティ施設である地区センターやコミュニティハウスの何処にでも、まだ、会社生活の匂いがぬけない男性たちの姿が見受けられる。社会教育施設も同様で、図書館や博物館には、今後の方向を模索して

いる定年後の男性が増えた。

市民活動に置き換えてみると、かつての昼間の市民活動やボランティアの担い手は、女性、夜の活動は、男性が多い、という分布が変わりつつあるのがわかる。増えつつある男性の社会参加、今後予想される団塊の世代の市民活動への参加を意識して2例を取り上げた。

② 子育ての環境を自らつくり上げる女性たち

一方、片倉うさぎ山公園遊び場管理運営委員会のように、個人の生活の課題や思いを仲間と共有して解決してきた例は、女性に多いようである。多くの女性が、子育てをすすめる中で困難を感じ、自分ひとりの子育てを地域の同じような環境の人と共にときを過ごす中で、少しでも気が楽になるように仲間づくりをしなから、模索する。これら仲間づくりやちょっとした学びの

場、相談する場がとても必要だ。横浜市では、そうした子育て中の親たちが「よこはま一人子育てフォーラム」という市内のネットワークをつくっているなど活発な活動が展開している。

地域に暮らす女性たちは子育て時期を過ぎても、生活の中に芽生えた課題に対する目線が社会的な課題でもあることを話し合う機会が多い。例えばPTAだったり、子ども会の活動だったり、さらに生協等の生活に関わる活動を経て、広がっていく。

これら課題を自分ひとりで解決することもあるだろうが、多くは仲間と一緒に解決しようという経験を経ることにより、より豊かな生活を得られる。その経験がさらに広い団体グループや人々とのつながりを求めるきっかけにもなっていく。うさぎ山公園プレイパークの瀬嵐さんの事例はその顕著な、そしてとても活発に活動している事例といえよう。

③ 行政が支援してきた「次の

二歩」

個人から生まれた思いを社会化するのに、区役所や社会教育施設の役割も大きい。生涯学習や家庭教育学級への参加、行政が行う講座、セミナー、「〇〇大学」などへの参加は、課題について学ぶと同時に、様々な手法も学び、市民同士の出会いや思いを語り合う場でもある。

行政との協働との誕生のキーワードは、講座のみではなく、コーディネーター役の職員であったり、行政の仕掛けたネットワークでもある。

個人の思いが「はじめの一歩」であると、狭く限定するならば、地域課題に取り組む多くのグループは、「次の二歩」に区役所や社会教育施設の役割を挙げている。これらの機関が地域を活性化する裏技をもっている、という側面は、得てして見落とされがちである。

単純に、女性、男性と分けるのではなく、うさぎ山公園グループも休日ともなれば、家族総出の参加となり、世代も異なる人々が集うように、

多様化する生活スタイルに対応した市民活動が地域に生まれている。

その「はじめの一歩」を「次の一歩」に結びつける事業の梃子入れが求められる。これまでのように行政主導型もあれば、協働型もあろう。

④ 多様な市民活動が地域の活力を支える

人と人とのつながりが希薄な都会でも、様々な市民活動が息づき、地域社会を支えている。むしろ、大都会横浜の持つ特性ゆえに、市民活動にのめり込んだ人たちかもしれない。多様な市民活動が地域の活力を支え、一方で活動に参加することで生き生きとした市民層を生み出している。そのような地域の活動を協働で進めることに、これからの横浜の進むべき道のヒントがある、と問題提起したのが、今回のコラボレーションフォーラムであった。